

## (2) 災害発生時に想定されるシナリオの例

災害発生時に起こりうる状況を想定し、6つのケース別のシナリオを作成した。併せて、起こりうる状況と関連深い自助・共助・公助の取組例を整理した。資料編ではシナリオ全文を掲載し、手引き本編ではシナリオの要所が明確となるように一部を抜粋した形で掲載している。

ケース①：都市郊外の自宅での被災と避難 [主婦と小学生]

ケース②：勤務地での被災と帰宅困難 [会社員]

ケース③：津波からの避難 [お年寄り]

ケース④：避難所生活 [乳幼児・けが人とともに]

ケース⑤：地域に根ざした小規模な工場 [工場長]

ケース⑥：都市郊外の自宅での被災と避難 [主婦と小学生]

シナリオは、以下のような構成となっている。

時間経過に従い、起こりうる想定される状況を記述。そのうち、自助・共助・公助の取組によって防ぐことができるであろう状況を下線付きの赤字で表現した。

「状況」と関連深い自助・共助・公助の取組例を記載した。

時間経過	状況	自助・共助・公助の取組例
17時 (発災直後)	<ul style="list-style-type: none"> <li>●夕飯の準備をしようと冷蔵庫から野菜を取り出したそのとき、突然下から突き上げるような揺れに襲われて、その場に倒れ込んだ。しかし、揺れが大きくて、なかなか身体を起こすことが出来ない。床を這ってダイニングのテーブルの下にたどり着いた。</li> <li>●揺れはしばらく続いた。<u>天井の吊り下げ式証明器具が大きく揺れている。テーブルの上の物が転がり落ち、突然大きな音がして振り向くと、キッチンの食器棚が倒れたのが見えた。</u>家は、メキメキときしむような音を出している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○地震時のけがの原因の約30～50%は家具類の転倒・落下によるという報告があります。建物の所有者や利用者自身が家具や本棚の固定を行い、多くの負傷者を減らすことができれば、その分の救命・救助の人員を、他の負傷者の救出に充てることができます。</li> </ul>

(ケース①：都市郊外の自宅での被災と避難 [主婦と小学生])

ケース①	主体	被災場所	時間
	主婦と小学生	木造住宅（木造密集所在地）	1月下旬の平日 17時

時間経過	状況	自助・共助・公助の取組例
17時 (発災直後)	<ul style="list-style-type: none"> <li>●夕飯の準備をしようと冷蔵庫から野菜を取り出したそのとき、突然下から突き上げるような揺れに襲われて、その場に倒れ込んだ。しかし、揺れが大きくて、なかなか身体を起こすことが出来ない。床を這ってダイニングのテーブルの下にたどり着いた。</li> <li>●揺れはしばらく続いた。<u>天井の吊り下げ式証明器具が大きく揺れている。テーブルの上の物が転がり落ち、突然大きな音がして振り向くと、キッチンの食器棚が倒れたのが見えた。</u>家は、メキメキときしむような音を出している。10分ほどして、揺れはおさまった。</li> </ul>	<p>○地震時のけがの原因の約30～50%は家具類の転倒・落下によるという報告があります。建物の所有者や利用者自身が家具や本棚の固定を行い、多くの負傷者を減らすことができれば、その分の救命・救助の人員を、他の負傷者の救出に充てることができます。</p>
17時10分 (発災10分)	<ul style="list-style-type: none"> <li>●ようやくテーブルから這い出し、娘のいる2階へ向かおうとした。2階からは、「ママー！」と娘の声が聞こえたので、少し安心した。</li> <li>●<u>床には、さまざまな物が散乱している。キッチンでは倒れた食器棚から食器類が飛び出し、床はその破片で埋め尽くされている。自治会から配布された、家具倒壊防止のつかえ棒を使っていれば…。使い方がよくわからず、夫にやってもらおうと放置しているうちに、地震が来てしまった。</u></li> <li>●階段を上り、娘の部屋の前にたどり着く。娘の部屋のドアを開けようとしたが、壁が歪んでしまったのか、開かない。私は、ドアを力いっぱい蹴破った。目に入ってきたのは、ドレッサーの下敷きになって動けなくなっている娘の姿だった。必死でそれを起こし、娘を助けることができた。娘の足には、大きな痣が出来ていた。部屋には私の背丈ほどの本棚があるが、幸いいくつか本が落ちた程度で、倒壊を逃れていた。そういえば、娘が以前学校で防災の授業を受けた日の夕食で、「本棚は</li> </ul>	<p>○家具倒壊防止器具の設置や耐震改修の実施など、最終的に住民自らが行動を起こし、完了させるべき対策も多くあります。自治体や専門家、まちづくり団体などにおいては、これら住民自身による対策が確実に完了するまで見届けることも重要です。</p> <p>○また、自助を促すための啓発活動を地域のイベントなどを通して行うことも効果的です。(⇒第3章取組例⑥参照)</p>

時間経過	状況	自助・共助・公助の取組例
	<p>下の方に重い物を置くと倒れにくいんだって」と話していたような気がする。</p>	
<p>17時20分 (発災20分)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●夫と中学校にいる息子の携帯電話に電話を掛けたが、不通である。外はどうなっているだろうと窓の外を見ると、前の家の瓦が落ちているのが見える。</li> <li>●その時、ふいに余震がやってきた。家がたてるみしみしという音が、恐怖心をかきたてる。阪神・淡路大震災のように、家が倒壊するかもしれない。</li> <li>●かねてから家族の避難場所は、娘が通う、広域避難所に指定されている小学校と決めていた。中学生の息子、東京都心に勤めている夫も、そこに向かうだろう。</li> </ul>	<p>○平時、私たちは電気、携帯電話のような情報通信機器に過度に依存した生活を送っています。災害時には、それら全てが使えないと想定した方がよいでしょう。そのような状況にある災害時において、家族が無事を確認め合う方法、落ち合う場所などについて、平常時から決めておくことが重要です。</p>
<p>17時30分 (発災30分)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●外に出たとたん、サイレンの音が耳に飛びこんできた。火事が起こったのであれば、大変なことだ。隣は空き家で草が生い茂っており、周囲には使い古された家具などが放置されている。<u>火の手が上がれば、我が家まで広がるだろう。次に戻った時は、もう家がないかもしれないな…。この空き家のことは、防災・防犯という観点では気になっていたが、事前に何か対策を打っておくべきだった。</u></li> <li>●ふと、娘が「誰かの声がする」と言う。耳を澄ませると、弱々しいうめき声が聞こえた。誰かが助けを呼んでいるようだ。声の元をたどると、斜向かいの家からのようだ。<u>私たち一家はここで暮らし始めて日が浅く、どのような人が住んでいるか全く分からない。</u>一人暮らしなのだろうか。いずれにせよ、このまま見捨てることはできない。家の周りに散乱している瓦を跨ぎながら、入口に近づいた。</li> </ul>	<p>○特に都市や都市周辺部の木造住宅密集市街地などにおいては、空き家が目立ち、災害時のリスク要因となることがあります。日ごろからこのような空き家の存在を把握し、住民と自治体とが連携して安全対策を講じることが重要です。(⇒第3章取組例①参照)</p> <p>○また、災害弱者となる住民の存在の把握も重要です。日ごろから声を掛け合うことで、住民同士による防災対策の協働、災害時の避難支援などをスムーズに行うことができます。</p>

時間経過	状況	自助・共助・公助の取組例
	<p>ドアの隙間から除くと、柱が倒れかけており、倒壊寸前と見えた。「大丈夫ですか？」と声を出すと、奥の方からか細いうめき声が聞こえる。しかし、そこまで到達するには柱を除ける必要があり、家が倒壊する可能性がある。ここは消防団などに救助を任せよう。後ろ髪が引かれる思いがしたが、家に戻ってペンと紙を取り、「人がいます」と張り紙をした。</p> <p>●小学校に向か合って歩き出した。夫と息子に電話をしたが、やはりつながらない。</p>	
<p>17時50分 (発災50分)</p>	<p>●小学校への道のりには、ブロック塀のある家が多い。崩れた塀が積み重なり、歩みを進めるのが難しかった。</p> <p>●大きな幹線道路の近くを通りかかったとき、<u>十字路で混乱が発生しており、消防車が右も左も動けなくなっているのが見えた。</u></p>	<p>○「やむを得ず道路上に車を置いて避難する際は、道路の左側に寄せて駐車し、エンジンキーは付けたまま」など、各人が災害時における適切な行動をとることで、多くの命が救われます。</p>
<p>18時 (発災60分)</p>	<p>●小学校まであと少しというところで、行く手の先の方でアパートの2階から火が出ており、燃え盛っているのが見えた。周囲は熱く、煙が充満しているため、通りぬけることができない。ふいに娘が「抜け道を知っている!」と言って今来た方向を指した。なんでも、普段は小さな会社の敷地内で私道となっているところが、災害時には通れるようになる、と言うのだ。社会科の授業で「街探検」をした際、そんな話を聞いたという。</p>	<p>○災害時には、地域の企業の協力が不可欠です。平時から、地域のまちづくり組織への参加等を通し、災害時の協力体制を整えましょう。(⇒第3章取組例⑤参照)</p> <p>○また、そのような取組状況を、住民が把握しておくことも重要です。地域との関わりが強いことの多い子どもは、そのような情報を効果的に伝達してくれることもあります。〔再掲〕(⇒第3章取組例①参照)</p>
<p>18時20分 (発災80分)</p>	<p>●娘のおかげで、小学校にたどり着いた。<u>小学校の避難所は、地域の人のみならず、一駅離れたオフィス街から逃げてきた人であふれていた。</u></p> <p>●とりあえず校庭の遊具に娘を座らせ、中に入ることができるまで待つことにした。息子に</p>	<p>○地域における避難計画においては、近隣に勤める人たちや旅行者などの「地域外住民」についても考慮する必要があります。地方自治体と、耐震性に優れた民間</p>

時間経過	状況	自助・共助・公助の取組例
	会えるといいのだが…。	施設の所有者とが、地域外住民の一時受け入れについて、平時から協議しておくことが重要です。(⇒第3章取組例③参照)

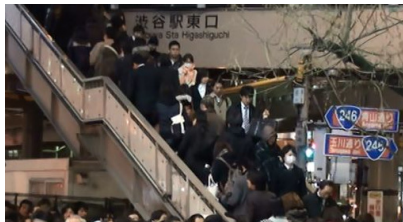
(ケース②)：勤務地での被災と帰宅困難【会社員】

	主体	被災場所	時間
ケース②	会社員／既婚	自宅から 1 時間の勤め先／ ビルの 10 階	1 月下旬の平日 17 時

時間経過	状況	自助・共助・公助の取組例
17 時 (発災直後)	<ul style="list-style-type: none"> <li>●突然皆の携帯電話が一斉に鳴った。緊急地震速報だ！机の下にもぐった瞬間、グラッと大きく横に揺れた。机の上にあるパソコン、コーヒーなどが机からすべり落ちた。</li> <li>●どん！と大きな音。<u>本棚が転倒した</u>。停電したようで、照明も一斉に消えた。今まで体験したことのない大きな横揺れが5分間ほど続いた。</li> </ul>	<p>○地震時のけがの原因の約30～50%は家具類の転倒・落下によるという報告があります。建物の所有者や利用者自身が家具や本棚の固定を行い、多くの負傷者を減らすことができれば、その分の救命・救助の人員を、他の負傷者の救出に充てることができます。</p>
17時10分 (発災10分)	<ul style="list-style-type: none"> <li>●上司は、自社の社員の安全確保、安否連絡の手順は把握していたようだ。しかし<u>協力会社のスタッフやアルバイトの安全確保、安否連絡をどうすればよいのか困っている</u>。自宅が近い者は、上司の指示を待たず勝手に帰宅を始めている。</li> <li>●オフィスはビルの10階にあり、地震の余韻で左右にまだ揺れている。このビルが完成したのは1970年台と聞いているが、<u>倒壊の危険性があるのではないかとにかくこのビルから出なければならぬと廊下に出た</u>。</li> <li>●廊下は、階段ホールに向かう社員でごった返していた。<u>エレベーターは停電で動かない。閉じ込められている人もいるようだ</u>。</li> <li>●非常階段に回った。ごった返していて前に進まない。皆手に携帯電話を持ち、家族や友人などに必死で連絡しようとしている。廊下を照らすのは窓からの僅かな明かりだけで、「押すな！」という男性の声や、女性の悲鳴などが響いている。</li> </ul>	<p>○昨今の企業は、一社の正社員だけではなく、派遣社員、パート従業員、アルバイト、下請従業員などが様々な人達から成り立っています。これら全ての関係者が、混乱せずに安全に行動するための指針を作成しておくことが重要です。</p> <p>○またこれら様々な関係者が同じ防災訓練に参加し、建物の安全性や避難方法の知識を共有したり、防災設備（エレベーター内の防災グッズ等）や物資の備蓄について意見を出し合ったりすることも、防災意識を高め、共有する上で効果的です。 (⇒第3章取組例②参照)</p>
17時30分 (発災30分)	<ul style="list-style-type: none"> <li>●家族への心配が大きくなる。普段のこの時間であれば、妻は自宅で夕飯の準備をしている</li> </ul>	<p>○帰宅行動の集中は公共交通の混雑を招き、救急活動や</p>

時間経過	状況	自助・共助・公助の取組例
	頃だろう。中学生になる息子は、部活で帰宅が遅くなるのが常で、今はまだ学校にいるはずだ。 <u>心配が高まり携帯電話で妻や息子に電話をかけるが、無音が続くばかりで通じる気配がない。とにかく、家に早く帰るしかない。</u>	消火活動に支障を来たし、被害を拡大させてしまう可能性があります。急いで帰宅する理由の一つは「家族の安全を確認したい」という点であることから、各人が、災害伝言板など災害時の安否連絡手段を家族間で理解・共有しておき、過度な帰宅行動の発生を抑制することが重要です。
17時40分 (発災40分)	<ul style="list-style-type: none"> <li>●ようやく1階の受付ロビーに到達した。受付ロビーの真ん中に、落ちた天井が粉々に砕けているの見える。どうやら誰かが落ちてきた天井で大ケガをしたらしい。気を失っているだけなのか、それとも・・・？<u>「助けてください！」</u>という声も聞こえるが、<u>一体どうすれば・・・。頭を悩ませていると、後ろからの人の波で、入口の方へ押し出されてしまった。</u>生き埋めになっている人は気になるが、こちらも家族のことが心配だ。</li> <li>●<u>道路は同じように近隣のビルから出てきた沢山の人があふれかえっていた。</u>取りあえず自宅まで続く大きな幹線道路を目指し、歩き出した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○災害時には、怪我人を助けなければならない場面に遭遇する可能性があります。それはもしかすると、自分の家族かも知れません。救命・救急訓練に参加することにより、最低限の救命方法や応急処置の知識を持つておくことが重要です。</li> <li>○沢山の会社が集まるオフィス街の場合、災害時に、多くの会社員などが帰宅や避難を試みる等により混乱が生じる可能性があります。平常時に、災害時の混乱を避けるための行動・設備計画について、近隣の企業同士で取り決めておくことが重要です。(⇒第3章取組例⑤参照)</li> </ul>
18時30分 (発災1時間半)	●歩きながら電話やメールをしていたので、 <u>携帯電話のバッテリーがきれた。</u> まだ家族の安否は確認できていない。 <u>公衆電話には長い列ができています。</u>	○発災直後においても、携帯電話にはバッテリーが残っていることが多く、また携帯電話の基地局も非常用電源で稼働している可能性があります。そのため発災直

時間経過	状況	自助・共助・公助の取組例
		<p>後の携帯電話は最大のサバイバルツールになります。市民自身や企業・学校等がそれぞれ携帯電話の非常用バッテリーの常備を進めておくことが重要です。</p>
<p>19時30分 (発災2時間半)</p>	<p>● <u>普段徒歩で通らない道なので、どこを歩いて</u> <u>いるのか分からなくなってきた。</u>2時間近く歩き、持ってきたペットボトルの水も無くなりそうだ。<u>自治体が、避難所や公園で飲料水を提供すると聞いたことがあるが、その場所がまったく分からない。</u></p> <p>● 目につく駅、コンビニには片っ端から寄ってみるが、どこも人でごった返している。コンビニの棚には全く商品が無い。<u>せめてトイレでもと思うが、「トイレは水が流れません」との張り紙が。</u>出張、旅行、就職活動中と思われる人も多く、駅、コンビニはそういう人たちに譲ろう。自分はまだ土地勘があるし、少しがんばれば自宅近くの避難所に入れるのだから。徒歩での帰宅を継続する。しかし、まだ家まで、半分の距離にも達していない・・・</p>	<p>○ 外回りや出張中の被災、自宅に要援護者がいるなど、なんとかして帰宅しなければならない場合もあります。個人としては平時から自分自身の帰宅路を（何パターンか）確認しておきます。それにより、土地に不案内な人に道を教えてあげるなどの支援を行うことも可能となります。また、沿道施設としては帰宅支援地図や飲料水の配布、休憩施設やトイレの貸し出し（既存のトイレ、空個室に設置した携帯トイレ）などの支援を行うことなどが考えられます。（⇒第3章取組例③参照）</p>



(出典) 三菱総合研究所撮影



(ケース③：津波からの避難 [お年寄り])

	主体	場所	時間
ケース③	高齢者(移動がやや困難。息子夫婦、孫一人と同居している。)	自宅、沿岸部	日中(自宅に家族がいない)

時間経過	状況	自助・共助・公助の取組例
13時 (発災直後)	<ul style="list-style-type: none"> <li>●私が住んでいる家は海から歩いて5分の場所にあります。市役所で働いている息子と、主婦の嫁と2人の孫との5人で暮らしています。主人はもう亡くなっています。私は足腰の調子がめっきり悪く、耳も遠いため外出がおっくうです。そのときは水曜日の午後で、孫は学校、嫁は近所のスーパーのパートに出かけており、私は一人居間でテレビを見ながらお茶を飲んでいました。</li> <li>●テレビは午後のニュースの途中でした。突然画面に大きく「緊急地震速報」の文字が映し出され、ニュースキャスターの緊迫した顔が見えたときは驚きました。ほどなく、大きな横揺れがやってきました。私は床に這いつくばり、5分程続いた揺れをやり過ごしました。嫁が一人であることの多い私を心配し、大きな戸棚は固定しておいてくれたため、私は怪我をせずに済みました。</li> </ul>	<p>○地震時のけがの原因の約30～50%は家具類の転倒・落下によるという報告があります。建物の所有者や利用者自身が家具や本棚の固定を行い、多くの負傷者を減らすことができれば、その分の救命・救助の人員を、他の負傷者の救出に充てることができます。</p>
13時3分 (発災3分)	<ul style="list-style-type: none"> <li>●揺れがおさまったところで、どのくらいの地震だったのか確かめようと私は顔を上げましたが、テレビは消えています。どうやら停電してしまったようです。東日本大震災のときは、地震のあとに津波がやってきて街が流されてしまったと聞いています。今の地震も大きかった。きっと今に津波がやってくる。<u>とにかく高いところへ逃げなければ、と思いましたが、テレビも消えてしまったため、情報がありません。</u>このようなとき、市役所の方が拡声器か何かで避難を促しているのをニュースで見たことがあるのですが…。</li> </ul>	<p>○沿岸部において揺れを感じた場合、情報や警報のキャッチより先に、まず高台に逃げるのが重要です。家族単位、地域コミュニティ単位で避難訓練を行い、津波の危険性を知り、避難行動を体に染み込ませておく事が重要です。(⇒第3章取組例②参照)</p>
13時5分	<ul style="list-style-type: none"> <li>●散らばった物につまずかないように気を付け</li> </ul>	<p>○「沿岸部において揺れを感じ</p>

時間経過	状況	自助・共助・公助の取組例
(発災 5分)	<p>ながら外に出て、海の様子を覗いたところ、海はいつも通り静かな様子。<u>ご近所さんも慌てている様子はありません。津波が来るとしても、もう少し時間がかかりそうに思えました。それに、少し待っていれば息子や嫁が迎えにくるかもしれないと思いました。お父さんの位牌と大切にしている婚約指輪、お財布に銀行通帳を持ちだす時間くらいはありそうです。</u>大切なものが、水に浸かってしまっは大変です。</p>	<p>じたら、まず避難」ということを頭では分かっている、つい色々なことを考えてしまい、避難行動に二の足を踏んでしまう事実も知られています。</p> <p>○そのような時のために、電源が入ってなくても緊急警報放送が受信できるラジオの準備、自治体が提供する防災メールへの加入等が有効です。特に高齢者に対しては、家族や地域コミュニティの支援のもと、これらの普及（＝モノの整備と使い方の理解）徹底をする事が望まれます。</p>
13時 15分 (発災 15分)	<p>●15分ほど待ちましたが、誰も家には戻ってきません。<u>自力で、高台にある息子の勤務先である市役所に向かおうと決めました。</u>このあたりは河川敷の扇状地で、広い平野が広がっています。高台に向かうには、川を上るようにしばらく歩かなければなりません。<u>市役所への道の途中にある、嫁が働くスーパーにも寄ることにしました。</u>もしかしたら会うことができるかもしれません。</p>	<p>○家族間で津波避難時の行動が徹底されていないと、避難の開始が遅れたり、危険な場所にいる家族を迎えに行ったりしてしまい、ひいてはそれが被害拡大の要因にもなります。</p> <p>○地域、学校、会社、病院、福祉施設等の避難訓練等への参加を通じ（もしくはそれぞれの合同訓練の開催を働きかけ）、各々の津波避難時の行動を家族間で共有することが重要です。〔再掲〕（⇒第3章取組例②参照）</p>
13時 20分 (発災 20分)	<p>●<u>道は高台へ逃げる多くの車で混み合っています。</u>途中で何人かの人に乗っていくように言われましたが、息子や嫁が迎えにきてくれるかもしれないと思い、断りました。<u>手押し車を押しながら、高台へと歩きますが、高台へ</u></p>	<p>○「防災まちあるき」により災害時に被害を大きくさせてしまう要因を把握し、地域コミュニティ内で共有し、解消するための手立て</p>

時間経過	状況	自助・共助・公助の取組例
	<p><u>向かう道路はカーブが多く回り道となっています。近道となる階段はありますが、わたしには足がきつくて使えません。</u></p>	<p>を検討することが効果的です。(⇒第3章取組例①参照)</p> <p>○新たな施設整備や改修、バリアフリーへの配慮など、住民だけでは解決が難しいインフラ整備の課題が浮かび上がってきた場合には、その解消を行政に働きかけることも重要です。住民自らの提案によって整備されたインフラ(例：避難路や避難タワー、車両退避スペース等)は、行政主導で整備されたインフラよりも住民の認知度が高く、利用率も高くなるものと予想されます。〔再掲〕(⇒第3章取組例①参照)</p>
<p>13時30分 (発災30分)</p>	<p>●ようやく嫁が働くスーパーにたどり着きました。しかし、中はもぬけの殻。啞然としてみると、後ろから私を呼ぶ声がします。「お母さん!」。息子でした。<u>息子は嫁と母を迎えに行こうと、一旦、沿岸の家まで車で戻ったとのこと。混雑している道を通ってきたため移動に時間がかかり、息子が家とスーパーについてたときは、すでに誰もいなかったそうです。</u></p> <p>●「学校を見てくる」。息子が言ったその時、大きな音で津波到来を知らせるサイレンが鳴り響きました。私たちは、学校が必ず孫を守ってくれるはず、と何度も自分たちに言い聞かせながら、車を乗り捨てて、急いで高台を目指すしかありませんでした。</p>	<p>○地域、学校、会社、病院、福祉施設等の避難訓練等への参加を通じ(もしくはそれぞれの合同訓練の開催を働きかけ)、各々の津波避難時の行動を家族間で共有することが重要です。(⇒第3章取組事例②参照)〔再掲〕</p>

(ケース④：避難所生活 [乳幼児、けが人とともに])

ケース④	主体	場所	時間
	主婦と小学生、乳幼児(3ヶ月)	避難所	地震発生の翌日(1月下旬)

時間経過	状況	自助・共助・公助の取組例
20時 (発災3時間)	<ul style="list-style-type: none"> <li>●大きな揺れの後、小学生の娘に言われるまま、ほとんど着の身着のまま、3ヶ月の息子を抱えて家を飛び出した。我が家は海岸近くに建っており、津波の危険性があるためだ。周りはもう暗く、どこをどう走ったか覚えていないが、津波防災訓練で何度も同じ道を走ったという娘が先導する方向へ、言われるまま高台に向かって走った。</li> <li>●幸い津波の襲来はなかったが、いつ余震、津波があるか分からず、家に戻る気はしない。高台で震えながら3時間、寒さも限界だ。避難所となっている小学校の体育館にたどりついた時には既に、避難所の前には長蛇の列が出来ていた。避難所は先着順だという。</li> <li>●夫は徒歩だと5時間程かかる会社に勤めている。帰宅中に地震に遭い、将棋倒しに巻き込まれて足を酷く負傷したと連絡があった。商店の軒先で一夜を明かして、明るくなったらこの避難所に向かってくるという。私は夫に、病院に行ってほしいと言ったが、<u>周りの状況を見ると、命に関わるわけではない怪我くらいで、病院に行くことはできないという。</u></li> <li>●息子は疲れや空腹によりぐったりしており、列に並んでいる途中で泣きだした。前の方にいた市役所職員の方が気づいてくれ、何とか先に入れてもらうことができた。<u>どうしようもないことだったが、沢山の人が待っている中、とても心苦しい気持ちになった。</u></li> <li>●避難所に入ったはいいが、<u>自分も昼間は働きに出ているため、実はご近所さんにもあまり知り合いがない。体育館内は、あちらこちらに「グループ」ができており、各自が家か</u></li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○子どもは地域内にいる可能性が最も高く、屋外で遊ぶ機会も多いと考えられるため、避難訓練を通じて、複数の避難開始地点からの避難路を教えることが効果的です。周りの大人たちを助けることができる可能性もあります。(⇒第3章取組例②参照)</li> <li>○避難所生活訓練により避難生活における問題点を把握し、地域コミュニティ内で共有し、解消するための手立てを検討することが効果的です。訓練においては高齢者役やけが人役等、要援護者役を演じる人を設定してロールプレイを行い、要援護者の視点からの対策項目の抽出を行うとより効果的です。(⇒第3章取組例④参照)</li> <li>○地域における日常的な協働関係がベースとして存在しないと、非常時における協働関係がなかなか構築しづらいものです。町内会やサークル・クラブ活動の推進により、平時からの地域コミュニティの醸成を図ることが重要です。</li> </ul>

時間経過	状況	自助・共助・公助の取組例
	<p><u>ら持ち出したパンや飲み物を融通しあっている。羨ましい。知り合いの少ない自分は入りづらい。</u>面倒なママ友の付き合いを、もう少し真面目にやっておけばよかったと後悔しつつ、誰もいないところに、なんとなく場所をとった。</p>	
<p>21時 (発災 4 時間)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●避難所で与えられたスペースは畳一畳程度。周りも沢山の避難者に囲まれている。体育館の床に簡単な敷物を敷き、毛布を 2 枚与えられたが、それでもほぼ直接床に触れることになるため、とても冷たく、寒い。乳幼児を連れている私を気遣ってくれる人も多いが、とても落ち着いて寝られる環境ではない。周囲の目が気になるが、その場で母乳を与えるしかなかった。</li> <li>●<u>家を出る際に、あるだけのおむつ、粉ミルクを持ってきたが、これから先の避難生活を思うと、全然足りないだろう。環境の悪さで子どもがどんどん消耗し、泣く回数が増えてくる。周りの人に大変申し訳ない思いがする。</u></li> <li>●<u>避難所では断水により水を十分に確保することができない。トイレも災害時用の簡易トイレであり、衛生状態の悪化が心配だ。</u>飲料水は小学校に蓄えてあった災害時用を与えられ、粉ミルクを溶かすために使うことができるだろう。しかし、ミルクの瓶は沸騰水による消毒が必要。限られた飲料水で、皆使うことを我慢しているところを、消毒用に追加してもらうことなど、とても言い出すことができない。</li> </ul>	<p>○多くの人が詰め掛けた避難所は一人あたりのスペースも狭くなり、物資も不足しがちです。自治体等による避難所用の間仕切りグッズの備蓄・活用、生活物資の備蓄も重要ですが、各個人で水・ミルク・おむつ・食料・毛布等物資の備蓄を行ったり、周辺の商店や民間企業が（自発的に）物資提供に協力したりすることにより、災害時における避難所の環境悪化を抑制するという考え方も重要です。(⇒第3章取組例⑤参照)</p>
<p>7時 (地震発生翌朝)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●<u>おむつはあと 2 日も持たない。今日は救援物資が届くという話を聞いたが、おむつは入っているだろうか。陸路が閉ざされているため、最低限の救援物資以外のものはまだ届かないかもしれない。</u>私も体や心がつらくなってきたが、何とかこの子を支えなければ…。</li> </ul>	<p>○各個人で水・ミルク・おむつ・食料・毛布等物資の備蓄を行ったり、周辺の商店や民間企業が（自発的に）物資提供に協力したりすることにより、災害時における避難所の環境悪化を抑制</p>

時間経過	状況	自助・共助・公助の取組例
		<p>するという考え方も重要です。〔再掲〕（⇒第3章取組例⑤参照）</p>
<p>10時 (地震発生翌朝)</p>	<p>●夫が避難所に到着した。足の怪我を押して、道で拾った棒切れをストック代りに、なんとか帰ってきてくれた。—安心したものの、足首が紫色になって腫れ上がり、もうしばらくは動きたくないという。<u>命に関わるものではないと思うが、早く病院には連れて行きたい。しかし子どもで手が離せない。</u>こういうとき、病院ではより緊急度が高い患者が優先され、相手にしてくれないのではないか。どうすればいいのか・・・</p>	<p>○避難所と医師・保健所等との連携（公助）も重要ですが、それとともに、自身や家族に生じる負傷・傷病を想定し、その際の対応（自分で実施できる処置、収集すべき情報・参照先、連絡を取れる専門家（遠方に住む医師の知人）などをイメージしておくことも重要です。</p>

(ケース⑤)：地域に根ざした小規模な工場 [工場長]

ケース⑤	主体	場所	時間
	工場長	操業開始前、早朝の工場	8月中旬の平日7時(始業前)

時間経過	状況	自助・共助等の取組例
7時 (地震発生直後)	<ul style="list-style-type: none"> <li>●私は地元の住民も多く雇用し、長年地域と良好な関係を築いてきたパン工場の工場長。車で出社、駐車場に車を停めてまもなく、とてつもなく大きい揺れを感じた。地面に這いつくばりながら敷地の外に目をやると、電柱がなぎ倒され、住宅の倒壊や火災が発生しているようだ。生まれて初めて目にする恐ろしい光景だ。</li> <li>●あわてて家に電話をするものの、つながらない。本社に状況を報告しようとしても、状況は同じ。一家の主として家に帰るべきか、工場長として会社に留まるべきか。<u>家族の安否、従業員の安否、本社や取引先との調整。どれを優先させるべきか。</u></li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○企業活動を早期に再開させるためにBCP(事業継続計画)の策定は重要です。従業員の安否確認、本社や取引先との調整などの記載とともに、従業員が各自の家族との安否確認を行う時間・手順・家族との連絡が付かない場合の対応などについても記載することが望ましいでしょう。</li> </ul>
7時15分 (発災15分)	<ul style="list-style-type: none"> <li>●工場の被害を確認する。<u>家族の安全とともに、従業員の今後の生活が心配だ。</u>製造設備がところどころ倒れ、天井や内壁が崩れ落ちている。社員がこの下敷きになっていたらと思うと、背筋が寒くなった。数日中の製造再開は難しそうだ。</li> <li>●<u>社員の安否確認をしたいが、連絡網は工場とは別棟の事務所の2階である。しかもPCに保存している。恐らくPCは使い物にならないだろう。</u></li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○企業活動の本質的な復旧・復興は、サプライチェーン全体の復旧(供給体制の復旧)や地域全体の復旧(地域からの需要の復活)無くしてはありえません。一社・一企業の事業継続とともに、サプライチェーン全体や地域全体の復興ビジョンを、関係者を交えて、事前に検討・共有しておくことが重要です。(⇒第3章取組例④参照)</li> </ul>
7時20分 (発災20分)	<ul style="list-style-type: none"> <li>●周辺で火災が発生しているらしく、周辺住民が工場に助けを求めて避難してきた。<u>事前に想像していなかった事態であり、地元自治体等とも話をしたことがなかったので、集まってきた人達に対してどのように対応してよいか分からない。</u>工場内は安全確認が万全では</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○企業や工場はオープンスペースや物資等が多く存在するため、災害時の一時的な避難や滞留において、地域への貢献が期待されます。(⇒第3章取組例⑤参照)</li> </ul>

時間経過	状況	自助・共助等の取組例
	ないため、入出荷のためのトラック駐車場のオープンスペースに待機してもらった。	○一方で、災害時における地元住民への対応方法を事前に検討していなければ、災害時にどのように対応してよいか分からないことがあります。そのため、事前に災害時協力内容の検討、協定の締結、具体的手順書の作成が望まれます。〔再掲〕（⇒第3章取組例⑤参照）
7時30分 (発災30分)	●出荷倉庫に、今日午前中に出荷予定だった菓子パンが大量に散乱している。普段から工場の騒音や集配トラックの往来などで迷惑をかけている <u>周辺住民の皆さんにお配りするのもよいだろう。しかし、どういうタイミング、手順でやればよいか。取引先への断りは必要だろうか。</u>	○（同上）
8時 (発災1時間)	●防災行政無線から、近くの堤防の一部が崩れたとの情報があった。工場は（マイナス）ゼロメートル地帯にあり、 <u>堤防の決壊により浸水する可能性がある。収容した住民を事務所棟の安全な場所に避難させなければならない。しかし事務所棟は大きくないため、新たに工場に避難してくる人達がいれば、収容しきれない。最寄りの避難場所を把握していないため、そちらに行ってもらおう指示もできない。</u>	○（同上）
9時30分 (発災2時間半)	●堤防が直ちに決壊等に至る状況ではないことが確認された旨が、防災行政無線より知らされた。しかし、付近ではまだ延焼が続いており、多くの住民は工場に留まりたいようである。そのため、社員を市役所に走らせ、住民への対応について指示を受けることにした。 <u>日頃から市役所や地元住民と話し合いをしておけばよかったと後悔した。</u>	○地域における日常的な協働関係がベースとして存在しないと、非常時における協働関係が中々構築しづらいことがあります。平時のまちづくり活動を通じた住民（町内会等）・地元企業と自治体との関係構築が重要です。



時間経過	状況	自助・共助等の取組例
12時 (発災 5 時間)	●住民が空腹を訴えている。倉庫には菓子パンが大量にある。 <u>避難所に避難せず、こちらに自主的に避難してきた住民に、優先的にこれらを提供してもよいのだろうか。</u>	○事前に災害時協力内容の検討、協定の締結、具体的手順書の作成が必要です。〔再掲〕(⇒第3章取組例 ⑤参照)
16時 (発災 9 時間)	●工場の被害状況もおおよそ分かり、緊急要員も集まったが、 <u>事業再開のために何から手をつけてよいか分からない。地元の商工会や同業者組合で話をしておけばよかった。</u>	○一社・一企業の事業継続とともに、サプライチェーン全体や地域全体の復興ビジョンを、関係者を交えて、事前に検討・共有しておくことが重要です。〔再掲〕(⇒第3章取組例④参照)
20時 (発災 13 時間)	●周囲が暗くなったが、停電は継続している。 <u>工場の事務棟はそもそも避難場所として想定していなかったため、照明を確保できない。</u> 真っ暗な中、余震におびえる長い夜が始まった。	○事前に災害時協力内容の検討、協定の締結、具体的手順書の作成が必要です。その上で、地域住民向けに整備・備蓄しておくものがある場合は、コスト負担や物資の融通等について、自治体との調整が必要です。〔再掲〕(⇒第3章取組例⑤参照)

(ケース⑥)：【河川氾濫】都市郊外の自宅での被災と避難 [主婦と小学生]

ケース⑥	主体	被災場所	時間
	主婦と小学生	河川近くの密集市街地	8月下旬の平日 15時

時間経過	状況	自助・共助・公助の取組例
15時	<ul style="list-style-type: none"> <li>●昨日から台風による大雨が続いている。昼過ぎから雨の勢いが増してきて、ホームページ等によると少し離れた河川の水位も上昇しているようである。</li> <li>●<u>この地域の浸水危険性がどの程度あるのかわからなかった</u>ので避難しなかったが、<u>子供もいた</u>ので非常に不安であった。雨が激しいので、避難を躊躇する気持ちもあった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○防災まち歩きにより、浸水危険性が高い場所や地域、安全な避難経路等を確認しておくことが有効です。(⇒第3章取組例①参照)</li> <li>○各自でハザードマップを確認することや、防災講演会や避難訓練等で避難を体験したり、ポイント等を理解することも重要です。(⇒第3章取組例②参照)</li> </ul>
16時	<ul style="list-style-type: none"> <li>●更に河川水位が上昇しているとの情報は得ていたが、<u>夕方</u>で少しずつ暗くなりつつあり、<u>雨風も強くて子供や高齢者等を連れて避難するのが大変な状況だったので、避難しようかととても迷ったが決心できなかった</u>。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○乳幼児や子供に対する支援も視野に、要援護者の避難を地域で支援する体制の構築が必要です。</li> <li>○地域イベント等を通して、支援を必要とする人の存在やその居場所等を把握しておくことも重要です。(⇒第3章取組例⑥参照)</li> </ul>
17時	<ul style="list-style-type: none"> <li>●防災行政無線で避難所が開設された旨の連絡があった。ただし、近くの知り合いに電話をしたりして情報を収集したが、<u>ほとんどの住民は未だ避難していない</u>。なので、<u>自分も避難しなかった</u>。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○過去の災害では、近所での声かけ等で避難を始めた人も多く、相互の声かけ等に関して地域で話し合いをしておくことも有効です。</li> </ul>
18時	<ul style="list-style-type: none"> <li>●河川氾濫の危険が高まったため、避難勧告が発令された。</li> <li>●<u>避難所に指定されている近くの小学校は浸水しないか心配であった</u>が、とにかく子供を連れて避難所に避難した。</li> <li>●風が強くて<u>避難の途中で子供が転倒して怪我をした</u>ほか、<u>子供を背負って避難したので非常に時間を要した</u>。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○各自でハザードマップを確認することや、防災講演会や避難訓練等で避難を体験したりポイント等を理解することも重要です。〔再掲〕(⇒第3章取組例②参照)</li> <li>○乳幼児や子供に対する支援も視野に、要援護者の避難</li> </ul>

時間経過	状況	自助・共助・公助の取組例
		<p>を地域で支援する体制の構築が必要です。〔再掲〕(⇒第3章取組例②参照)</p>
19時	<ul style="list-style-type: none"> <li>●堤防が決壊して避難指示が発令された。</li> <li>●後から聞いた話によると、<u>高齢者等の中には浸水の危険性がある自宅から遠くの避難所に避難できない人もいた</u>ようである。また、<u>マンションの住民の中には、避難せずに自宅にとどまる人も多かった</u>ようである。</li> <li>●近くの親戚や、会社・高校から帰宅していない家族の安否確認をしていると、携帯電話の電源が切れた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○乳幼児や子供に対する支援も視野に、要援護者の避難を地域で支援する体制の構築が必要です。〔再掲〕(⇒第3章取組例②参照)</li> <li>○近くの避難場所を確保するために、マンションや事業所・工場等と相談しておくことも有効です。(⇒第3章取組例⑤参照)</li> <li>○共同化により避難場所となるマンションを整備することも考えられます。</li> </ul>
20時	<ul style="list-style-type: none"> <li>●<u>避難所は多くの人であふれていて、場所取りや食料等の取合いで険悪な雰囲気になる場面もあった。ペット連れの住民のトラブルもあった</u>ようである。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○避難所運営等について、事前に地域で相談しておくことも重要です。(⇒第3章取組例④参照)</li> <li>○防災イベント等を通して地域で顔見知りが増えれば、避難所での助け合い等が期待できます。〔再掲〕(⇒第3章取組例⑥参照)</li> </ul>
翌日	<ul style="list-style-type: none"> <li>●避難した後も数日後まで避難勧告・指示は解除されなかった。</li> <li>●<u>ある程度水が引くまでの間は自治体の方でも食料等の調達に支障を来し、慢性的に食料不足やトイレの利用支障等に悩まされた。</u></li> <li>●事前の準備をしていなかったのと、急いで避難することに気を取られていたので、<u>自宅から食料や着替え等を持ってくるのを忘れた。</u>後で夫と合流して、夫が取りに行ってくれた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○近くのスーパーや食品工場等の協力を相談しておくことで(協定締結も含む)、災害時の食料調達等に役立つと考えられます。避難場所としての活用も同時に相談するとよいでしょう。〔再掲〕(⇒第3章取組例⑤参照)</li> <li>○災害時にスーパーの商品を従業員に代わり、住民が主</li> </ul>

時間経過	状況	自助・共助・公助の取組例
	 <p data-bbox="437 580 959 663">(写真) 東海豪雨における新川の破堤状況 (西枇杷島町)</p> <p data-bbox="403 676 959 853">(出典：内閣府（防災）HP、 <a href="http://www.bousai.go.jp/kohou/oshirase/h13/130126chubo/shiryo3_3.html">http://www.bousai.go.jp/kohou/oshirase/h13/130126chubo/shiryo3_3.html</a>)</p>	<p data-bbox="1034 241 1390 472">体となって販売する（価格は住民に任せるが、お金はもらう）協定を結んでいる事例もあります。〔再掲〕 (⇒第3章取組例⑤参照)</p> <p data-bbox="1034 486 1390 613">○地域で、水害も想定した備蓄倉庫を整備しておくことも有効です。</p>